

## 神様の人類救済計画を 担ったマリアの信仰

ルカ1章26～38節

2020年12月06日

松田 基子 師

私たちは自分の人生の幸せを求めて、人類の歴史のほんの一点を生きていますが、人間に命を与えられた造り主である神様は、人間が神様に背き、その行く先が、永遠の滅びに向かったその時から、**地上の歴史を人類救済の歴史**に導かれました。

聖書は、私たちに、その事を教える**命の書**です。そこには神様が、**人類を永遠の罪の滅びから救い出す**ために、全人類の価値に優る神の御子を、救い主として**送られる迄の歴史**が記されています。

神様は、時速5kmの神と呼ばれる程に、人間と共に歩いて、人間に救いの道を教えて来られました。人類の救い主の祖に選ばれたアブラハムによって、その子孫イスラエルの民は、救い主が生まれてこられる民として選ばれ、神の民となり、神様に従う道を学びました。

アブラハムから千年後、神様から愛され、救い主、誕生のための血筋に選ばれたのは、イスラエルの黄金時代を築いたダビデ王でした。神様はダビデに、サムエル記下の7章16節で、  
「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」

と約束されました。ダビデ自身は、その深い意味は分かりませんでした。神様は時代と共に、預言者を通して、その意味を明らかにして来られました。

ダビデから300年くらい経った頃、預言者イザヤはイザヤ書9章の5節、6節で、  
「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えら

れた。権威が彼の肩にある。その名は『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』

と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」

と預言しました。

しかし、現実のユダ王国は、歴代の王たちの、強国への依存、偶像礼拝による神様への不従順によって、衰退の一途を辿りました。結果、紀元前586年には、ダビデの血筋をひくユダ王国はバビロニア帝国に滅ぼされて、要人たちはバビロンに捕囚として連れて行かれました。

亡国前に預言したのはエレミヤでした。彼はエレミヤ書23章5節、6節で、

「見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。王は治め、栄え、この国に正義と恵みの業を行。彼の世にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。彼の名は、

『主は我らの正義』

と呼ばれる。」

と、ダビデの子孫からの、救い主来臨を預言しました。

紀元前539年、ペルシャ王キュロスは、バビロンを倒し、その後、捕囚民の解放令を出しました。そこで、信仰復興、神殿再建を願うユダヤ人達は、エルサレムに帰って来ました。しかし、強国の支配のもとに置かれ、紀元1世紀の頃はローマ帝国の支配のもとに、その圧制に苦しんでいました。

ただ、ユダヤ人たちは、信仰に熱心でした。彼らは、ローマ帝国の圧制の下で、信仰によりどころを得ていました。預言者達が語ったメシア、救い主来臨の預言を信じて、待ち望んでいました。

『神様は、必ず約束は果たされるお方だ。  
ダビデの子孫から、ダビデのように、ユダヤに  
繁栄をもたらしてくれる王が現れる。そして、  
自分達をこの窮状から助け出してくれる。』  
その望みを置いて、彼らはメシア待望に心を注  
ぎました。

ダビデ王の時代から早、千年が経ちました。  
救い主メシアは、ダビデの子孫としてお生まれ  
になる。それはユダヤ人であれば誰も周知の  
ことでした。しかし、現実にはローマ帝国の  
支配の下、皇帝からの恩典で、ヘロデ家が、  
ユダヤの王であり、ダビデの子孫たちはどこに  
居るのか、埋もれてしまっていました。人の目  
にはわかりませんでした。神様は人類救済の  
ご計画を変える事なく、御自身のご計画を進め  
ておられました。

神様は、ご自身の独り子を救い主として、世  
に誕生させるに当たって、救い主の先駆者とな  
る、存在を備えるべく、信仰篤く、神様の前に正  
しく、非の打ち所のない、老祭司夫婦に、その  
先駆者を授けることになりました。妻エリサ  
ベトは、不妊のまま、老齢になっていましたが、  
妊娠する事が出来ました。

それから半年後のことが、今朝のルカ福音書  
1章26節に記されています。

「6か月目に、天使ガブリエルは、ナザレとい  
うガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ  
家のヨセフという人のいいなずけであるおと  
めのところに遣わされたのである。そのおと  
めの名はマリアといった。」

とあります。神様は人類の救い主を、人の世に  
誕生させると言う、重大な務めを、名もない1人  
の乙女に託そうとおられました。神様が御  
覧になるのは、人間的な能力や容貌ではなく、  
神様への信仰、真実であることが分かります。

ガリラヤの町、ナザレはユダヤ教の本山、エ  
ルサレムから遠く、歴史的には、隣国と接してい  
るために、外国の支配を受け、異邦人が入植し

た時代もあり、異邦人のガリラヤと呼ばれて、ユ  
ダヤ教中枢からは軽蔑されていた地方です。  
そこに住む乙女に神様の目は注がれていました。  
それというのも、彼女はダビデの血筋を引くヨセ  
フと言う人の許嫁でした。

神様は決して強制される方ではありませんが、  
一人ひとりの人生を御自身の御計画に導かれる  
お方です。そのことを考えますと、神様はヨセ  
フとマリア、二人を生まれる前から選び、信仰を  
与えて、ご計画の下に導いて来られたのでした。  
マリアはただ、心から神様を信頼して崇め、何よ  
りも神様第一とする生き方に集中していました。

そのマリアの所に、天使ガブリエルが訪れ、  
言いました。

「おめでとう、恵まれた方。

主があなたと共におられる。」

これは天使のマリアに対する、心からなる挨拶  
です。ラテン語で「アベ・マリア」です。

自分に、嬉しい、喜ばしい事があったなら、

「おめでとう」

と挨拶されることは、嬉しい事ですが、マリアは  
天使との出会いと、また、心当たりの無い挨拶に  
恐れと、戸惑いを感じました。

20節に、すると天使はマリアに、

「マリア、恐れることはない。あなたは神から  
恵みをいただいた。あなたは身ごもって男  
の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」

と言いました。

「恐れることはない。」

私たちは何と、事ごとに恐れることでしょうか。  
人は誰も、今まで経験したことのない場面に直  
面しますと、

『どうなるのだろうか』

と不安を抱くものです。恐れは自分の身に危  
険を感じて、物事を正しく判断することが出来  
ません。色々な場面に遭遇した時、先ず、恐れ  
ないと言う事は、事態を冷静に受け止めるた  
めに、とても大事なことです。

どの様にしたら、恐れが取り去られるのでしょうか。それは、

『神様の御手に守られている』

と言う確信です。マリアは天使の、

「恐れることはない。」

と言う言葉、

「神様が共におられる」

と言う言葉、

「神から恵みが与えられた。」

と言う言葉に信頼しました。そして神様の御手に握られている事を、確信しました。

ところが天使は、驚くべきことを伝えました。

「あなたは身ごもって、男の子を生む」

と言ったのです。まだ、そのような世界を知らない乙女に対して、衝撃の言葉でした。しかも、名前まで命じられています。イエスと言う名は、神は救いなりと言う意味です。信仰の篤い親が、よく子どもに付ける名前でした。多くの子供たちがその名をもっていました。しかし、天使が命じたイエスと言う名は、親の願望で付けられる名前ではなくて、神様が付けられた名前でした。ですから、その名前の意味には、神様の御心が込められていました。

32節に、

「その子は偉大な人となり、いと高き方、(つまり、神様)の御子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」

この言葉こそ、ユダヤの民が、ダビデから千年の間、待ち続けていた言葉ではありませんか。それが実現すると言うのです。そして、33節を見ますと

「彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」

と天使は言っています。

永遠ですから、この地上の時間を越えています。ヤコブの家と言われているが、永遠の世界のヤコブの家と言う事になれば、それは地上の小さなユダヤの国ではなく、神様を信じ、従う人達の事を意味しているに違いありません。

真の救い主は、遂には悪を滅ぼし、王の王となられ、全世界を完全に支配なさるのです。

そのような救い主がお生まれになるのです。天使はマリアにその事を告げましたが、マリアは大きな疑問が湧いてきたので、勇気を振り絞って言いました。

「どうしてそのようなことがありえましょうか。」

私は男の人を知りませんのに。」

マリアにとっては、大変な問題で、無理からぬ問いです。しかし、神様のなさることは、人間の思いを越えています。私たち人間の考えは、本当に狭く、小さくて、私たちはそのために、神様に幾たび

「どうしてそのようなことがありえましょうか。」

と神様の御心を拒否して、神様の御計画心を阻んでいることでしょうか。確かに結婚していない女性が、子どもを身ごもると言う事は、人間の常識では考えられない事です。

私たちは、常識を働かせなければなりません。しかし、信仰は常識を超えて行かなければ、味わうことの出来ない世界でもあります。それを判断するのは、聖霊の働きです。

35節で、天使はマリアに答えました。

「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」

と告げました。詳訳聖書では、

「聖霊があなたに臨み、いと高い方の力が、輝く雲のように、あなたを覆います。それ故に、あなたから生まれる聖なる清純な罪の無い方は、神の御子と呼ばれます。」

とあります。

旧約聖書に於いて、神様の臨在は、雲によって現されました。輝く雲のようにあなたを覆うと言うことは、すべて神様の御手に守られ、神様の御業であると言う事を現しています。神様が自分を用いて、ご計画を実現しようとしておられる。それは神様がなさる素晴らしいことですが、マリアにとってはとても不安なことでした。

神様はマリアのその心を、決して軽んじられませんでした。

そこで、天使は言いました。36節に、  
「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう6か月になっている。」

と教えてくれました。その言葉はマリアを大いに励ましました。マリアはエリサベトの信仰をよく知っていました。神様はそのエリサベトに先に働きかけられました。彼女はそれに応答しているのです。神様に従おうとする者は、既に従っている人の姿に励まされます。そして、共に立ち上がって、同じ道を歩む決心が出来ます。

天使ははっきりと言いました。

「神にできないことは何一つない。」

詳訳聖書には、

「神にとっては何事も決して不可能ではありません。神から出る言葉で、実現の力の無いものは一つもありません。」

と訳されています。全知全能の神様は、無から有を呼び出されるお方です。天使はその神様の絶対的な力を、マリアに宣言しました。マリアは天使の言葉を受け入れました。彼女は神様に深く信頼していました。この後、どの様な事が起こるのか、それは神様にすべて、お委ねする決心をしました。自分の務めはただ、自分の身を通して、神様の栄光が現れることだと確信していました。

マリアはすべてを神様に委ねて答えました。

38節に、

「わたしは主のはしためです。」

はしためとは、女奴隷の意味ですが、当時の奴隷は絶対服従を強いられました。マリアは自分から進んで、神様への絶対服従を願いました。マリアはそれ程、神様に信頼仕切っていたのです。そこで、そこから出て来た決心が、

「お言葉どおり、この身に成りますように。」

との答えでした。マリアはただ神様だけを見つ

めていました。そのマリアの神様への従順によって、神の御子イエス様はこの世に生まれて来られました。

神の御子が、乙女マリアから生まれてこられたと言うことに、この世の人々はつまづきます。しかし、聖にして完全な神様が、罪に汚れ、永遠の滅びに向かう人類を愛し、救われると言う事は、更にあり得ない奇跡です。この事が分からなければ、マリアの信仰に続く事は出来ません。神様は、人間の歴史を、人類救済のために導いてこられました。遂に、人類の罪を贖うために、神の御子が、乙女マリアより生まれて来られるのです。ここに人類救済の道が開かれるのです。私たちは今、その恵みに与った者として、マリアの信仰に倣い、神様への信頼と服従を新たにしてい、イエス・キリストの福音に仕えて行こうではありませんか。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様の、私たち人類を、御子を賜ってまで、救おうとされたご愛に、心から感謝します。そのご愛に、マリアの信仰をもって、私たちもこの身をおささげする者とならせて下さい。

イエス・キリストの救いを受け入れる人々を興して下さい。

クリスマスを迎えます。主よ、どうぞ、お一人おひとりの内に、イエス・キリストの降誕をお与え下さい。

尊い救い主 イエス・キリストの  
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。